をよむは、三代實錄に見ゆ、榲を譌りたるなるべし、

〔鹽尻五十四〕一杉被の二字、互にスギともマキとも訓ぜり、スギとは直木の轉語也、マキは眞木也、ゆるまざるを謂、倭歌にもまきの戸とよめるも、まき立山などいへるも、杉の木の事なりとかや、

〔古事記傳九〕榲諸本椙と作、今は延佳本に依れり、抑古書どもに須疑に此字を用ひ、或は椙とも多く作り、書紀顯宗卷に振之神榲、榲此云須疑と見え、出雲風土記に、杉字或作椙と見え、萬葉などにも、杉椙ともに用ひたり、和名抄に杉和名須木、今按俗用榲字非也、榲柱也、見唐韻とあれど、漢籍にも集韻に榲音溫、杉也と云り、此は宋代の書なれども、古き據ぞありけむ、さて榲を椙と作かくは、常木かたはらへはびこらず、たゞに上へすゝみ上る木なれば、直木とするはわろし、直をすぐと云こと古にあらず、

〔日本書紀十五顯宗〕天皇詔之曰、石上振之神榲、榲此云須擬、伐本截末、註略於市邊宮治天下、天萬國萬押磐尊御裔、僕是也、

〔出雲風土記上意宇郡〕神名樋山、中略凡諸山野所在草木、中略杉字或作椙

〔萬葉集四相聞〕丹波大娘子歌

味酒呼三輪之祝我、忌杉、手觸之罪歟、君二遇難寸

〔夫木和歌抄二十九杉〕題不知　よみ人しらず

かみなびのみむろの山にかくれすぎ思ひすぎんやこけをふるまで

〔大和本草十一園木〕杉　木直ナリ、故スギト云、スキハスク也、種類頗多シ、赤白アリ、赤杉ヲ爲良、鬼杉アリ、木ヲヂケ木理ユガミテアシ、不可植、日本ニ昔ハ杉ヲマキト云、マキノ戸ナド云モ杉戸ナリ、凡杉ハ美材ナリ、柱トシ棺ニ作リ、土ニ埋ミ桶トシ、水ヲ入テ久シク不腐、屋ヲツクリ船ニツクリ、帆柱トシ、器ヲ製ス、甚民用ヲ利ス、枝ヲ正二月ニ插ミテ能生ズ、ヒドモ、實ヲウヘタルガ、正直ニ美材トナルニシカズ、山ニ宜シク黃赤土ニ宜シ、沙土ニ不宜、棺ニ作ニハ赤キ油杉ヲ用ユ、油杉ノ香